

山形大学附属博物館報 5

THE MUSEUM OF YAMAGATA UNIVERSITY

1978 7.1

目次

附属博物館の発足にあたって……………	(1)
附属博物館規則改正に寄せて……………	(1)
雑感……………	(2)
庄内の美田に思う……………	(3)
資料紹介—I ラグーザ夫人・清原玉女の絵, II 近世史料古文書……………	(4)

附属博物館の発足にあたって

館長 川 副 武 胤

本館の名称・規則・機構の変更(改正)のことがようやく本決まりになった。今回採用されることになった「山形大学附属博物館」という名前は、館報第1号に工藤前館長が紹介された通り、すでに昭和49年2月の博物館運営委員会において一致した意向であったが、その後決定までの4年ほどの間に、委員の交替や情報の混線等のことがあって多少迂余曲折を見た。しかし今日結局当初の委員会の意向通りになったのは、やはり大勢の指向するところがそこにあったということであろう。

館報第2号の長井元館長の「成立の思い出」と、上記第1号の工藤前館長の文や、同じ号の私の小文、第3号の前館長と私の文を読んでいただければ、本館の歴史が鮮かにうかび上って来よう。

さて、今回の改正によって本館は総合大学の研究資料館としての名目を備えたわけであるが、実質としてはまだまだで、近世古文書や、一部標本類のように、すでにかなり豊富な資料類もみられるけれども、全体としては今後の努力・御助力にまつところが大きい。

また、これまで地域文化の向上のために寄与して来た長い沿革と実績があるが、新しい規則にもうたってある通り、引きつづき一般に公開して、この面でも使命を果たしたい。この点についても大方の御援助を期待するものである。従って、本館がこれまでその名称として来た「郷土」性は、本県域の中では、そのかなりの比重が県立・市立その他の博物館に移ると考えられるけれども、他館と併存して、大学には大学らしいより学術的な、或は学際的な、或は総合的な領域において特色を発揮することになるかと思う。また本学がこの山形県という特定の地域に存在するかが、これまで収集して来た資料

同様、今後も地域性をもつ資料が蓄積されるであろうこともまた当然である。

次に機構をあらためて八部門二室制としたが、これは卒直にいて、実体の伴うものもあり、また伴わないものもある。実体の伴うものとは、歴史・民俗、考古、地学、地理、動物、植物等の部門であって、勿論これとて甚だ不十分なものであるけれども、農学、医学等の部門に至っては、現在の段階ではまずはほとんど実体は伴わないといってよい。しかしあえて、上記諸部門を設けたのは、「渠成って水至る」のたとえの通り、“期して待つ。ところがあるからである。また、すでに館報第1号にものべた通り、キャンパスを異にする医・工・農等の学部が、将来同じキャンパスを主体(母体)として発展することを予想するなら、当然図書館がそうであるように、“分館。的なあり方も想像できる。そうしたあり方に対するよび水としても“本館。的存在に、その容れ物が必要だと考えられた。また異なるキャンパス相互に知識を交換しあう場が必要である。上記諸部門の設置の意図は上の通りであるので、この点については、特に該当する医・工・農各学部の御理解と、積極的な御助力を願いたい。尚、最後に、ここまで当館を育成してこられた長井元館長、工藤前館長、また、考古部門の充実にこれからもお世話にならなければならない、柏倉亮吉名誉教授は勿論、鈴木庄一郎、江田忠両名誉教授をはじめ、関係する方々の、一層の御指導、御協力をお願いして止まない次第である。

附属博物館規則改正に寄せて

今 井 大

山形大学附属博物館の館名変更に伴い規則が改正されるにあたって、新規則の中にもあるように医学部も運営

面で仲間入りをしたことから、川副館長から医学部として希望あるいは抱負などを書くよう申し出がありました。小生、医学部からの委員であるため何か書かなければならないことにあいなりました。いざ書こうと思っはみたものの博物館の存在意義については漠然とした認識をもってはいるものの、不勉強の為なかなかなペンを走らない始末で、まず文を書くには文献的考察をするは研究者のならいということ、博物館とはと考え百科事典をみることからはじまりました。しかし、学者間にもその定義の表現に相異があり、結局、日本の博物館法第二条に記される内容がその要約となりそうです。即ち、歴史・芸術・民俗・産業・自然科学などに関する資料を収集し保管し、展示して教育的配慮のもとに一般公衆の利用に供し、その教養・調査研究することを目的とする機関という事になる。また、国際博物館会議の定義では「文化的または学術的意義の深い資料を収集し、これを研究教育および楽しみの為に保管し、展示する常設機関はすべて博物館とみなす」となっている。この定義には(1)公共図書館および文書館によって経営される常設展示館、(2)公衆に公開されている寺社の宝物類・史跡・遺跡・自然景観などのような歴史的記念物または附属物件、(3)生きている資料を展示している植物園・動物園・水族館・生態飼育館およびこれに類する機関、(4)自然保護地区等自然界における文化的・学術的意義の深い資料はすべて博物館にかかわりを持つてくることは当然考えられる。

医学においてはなおさらの感を持つ。何故ならば、医学は自然科学であると同時に社会科学的要素を多分にもっているからである。WHO(世界保健機構)の医学の歴史によれば、医学の論理的な側面、即ち生物物理学、生化学、生理学、生理病理学、微生物学、薬物学などは、医者が実際に使う科学の合理的で実験的な基礎になっている。つまり医学というものは、もともと私達の人体におこる様々な働きに関する応用科学であるからである。そのような場合、医者は患者の人体の変化に対して、一般的な種々の法則にしたがって反応する一つの「生きた物体」ということになり、この科学は自然科学の単なる一分野とみなさざるを得ない。医学のこのような分野に焦点をしばって博物館を考えた場合、医学部それ自身が博物館の要素を持っており、他の自然科学と変らないといえよう。

このような意味からも現在山形大学博物館は広い意味での自然科学としての医学をとらえた場合大きな存在意味をもつものと考えられる。一方、医学は自然科学的な面と患者に接するという社会的な面をもった独特な要素を有する科学であって、この医者対患者との関係は医学の面に如何に自然科学的要素が多くなっても、昔から全く変わっていないと思われる。即ち、医学は社会科学や倫

理的側面を持っているものである。

疾患に対して最も初期の治療は科学的知識に基づいたものではなく、神話、信仰、儀式などに基づいた社会制度の一部であった。事実、こうした魔術的、宗教的な態度は医療が近代科学的な医療にくらべ、はるかに長い間、またははるかに広い地域に亘っており、現在でも決して消滅しているわけではない。今日でも、祈禱師、巡礼は勿論のこと呪い師、占星術師に人気があることは、近代生活の最も特徴な面の一つとして、しばしば話題にのぼっている。「科学への信頼」というものがどんなに不安定であるかを物語るものともいえよう。このような事は、医学が自然科学と同時に社会科学的要素を多分に有していることを物語っている。医学を社会科学的な面からみて、博物館との関連を考えると、山形地方ではこのような資料は、市街の古い屋敷・家屋や山間農村までが近代建築に一変しつつある中で、一片の紙屑として消滅・放棄されようとしているのが残念に思えてならない。

このような資料を収集・保管するのは今において他にはない。一片の紙切れである江戸時代の処方箋にも、その時代の医学の歴史的背景のあることを思うとき、博物館は常にその方面に目を光らし、貴重な資料・文化遺産を後生に残すよう努力してもらいたいと思っている。

(医学部教授 博物館運営委員会委員)

雑 感

高 橋 伸

大部分の工学部教官は時折博物館に行くことはあっても、その企画や運営には無関心で、山形大学附属博物館についても、制度上やむなくその運営に参加しているのが実状である。並び大名なので、幕があがったあともつい他の事を考えたり私語したり、立役には申訳なく思っている。

師匠がそうだから弟子も勿論。工場見学で学生を引率したとき、午後半日あいたので「東京見物でもしろよ」ということで博物館を始め近代美術館や西洋美術館、プリジストンやサントリイなどの場所を教えた。結果は羽田に行った学生、横浜埠頭に、印刷機械だか工作機械の展示会に晴海に其他で、一人も上野や竹橋などに行った学生はなかった。昼食もろくにたべず、20分近くかけて行き方を丁寧に説明したのに、と心外な気持ちだった。

孫が生れるまでは、よく奈良や京都、東京の博物館に行った。鎌倉仏像や醍醐寺展のあった時は、研究打合せや会社訪問の名目で見に行った。ふつう遠出できるのは夏休。暑いので半日歩けばのびてしまい、宿で高校野球をみる始末なので、一日あたり二、三の寺を拝観するの

がせいっぱい。その点博物館での特別展は楽しかった。遠く離れて薄暗い所で眺めるのと違い、近くから正面だけでなく側面からも明るい照明のもとで観賞出来るのは嬉しい。唐招提寺の鑑真像など日本人はよほどのチャンスに恵まれないと拝観出来ないのに、パリの人は自由に観賞出来たのは不公平に思われる。もっと博物館が積極的に働いてくれないと、つい——悪いけど——税金ドロボーともいいたい。戒壇院で他の参拝者に気がねしながら、ついねばりすぎて、おりるとき足がつっぱり危くおちる所だったり、三月堂で日光月光もさることながら、不動明王にみとれて時間切れ、追い出されたり。博物館でみたとしても同じかもしれないが、もっとドライな気分で見られる点助かる。

話は変わるが、博物館という我々庶民には縁遠い存在になっている。関心をもたぬ我々が悪いのか、おたかくとまっている博物館の方が悪いのか。陶器をみて宋と元とはどっちが昔だったかな、その頃の日本の時代は、などと迷う凡人相手と考えて、博物館の方ももっと考えてほしいと思う。といて、あまりくだくだしくなると、またそっぽを向かれるので、我々を御し難い小人と観念して、うまくやってくれることを願う。山形大学附属博物館もかつては「郷土。がついてたので、郷土の遺跡や歴史も必要かもしれないが、「まあ私には関係ない」といった人もいた。今回部門増になって、より多くの人々の関心を集め得るようになったのは幸いである。私の例であまりあてにはならないが、どこの博物館に行っても、ざっとひとまわり、あとは一部門かせいぜい二部門を詳しく見るだけである。ただ部門増のため、薄まってしまって、雑多なまとまりのない、しかもレベルの低いものになりはしないかと恐れる。目玉商品という用語感は悪いが、そうしたものが新しい部門でも一つや二つは欲しいものと願っている。

増加した部門の中に工学部門もある。どんな形にもってゆくのかと問われても答えようがない。公立の博物館（例えば交通博物館）や企業のそれ（例えば日立の小平記念館）はいろいろ見てはいるが、私が運営委員なら（そして現に委員なので困っているのだが）単なる show room 式（例えば日立の商品の展示室）になりかねない。科学史は材料力学のそれを僅かに知っているだけで、材料力学は機械工学のなかのごく狭い一分野だし、機械工学は工学の中の一分野にすぎない。ゆくゆくは適任の方に運営委員になっていただいて、と考えているが、さしあたりは諸賢の適切なアドバイスに期待しておりますので、皆様によしくお願い申し上げます。

（工学部教授 博物館運営委員会委員）

庄内の美田に思う

川 嶋 次 夫

今回本学郷土博物館は博物館へと名称が変更されることになった。同時に規則・細則も改訂されて資料の集積保管等は本学全学部の研究分野を網羅するものとなるらしい。これによって発展充実の基礎ができるわけで、今後はさらに関係者の御努力によって文部省交付予算の増額や定員の配当を期待したいものである。

農学部はその前身である県立農林専門学校時代を含め本年3月で満30年を迎えた。創立当時は農学・林学の2学科だけで教職員54名、学生入学定員120名にすぎなかったが、現在は5学科となり教職員141、学生入学定員155名に増加し大学院修士課程も設置されている。附属農場は設立当時の頃から3ヶ所に分散していて不便であったが、昭和50年4月、現在の金峯山北麓に1ヶ所にまとまった25haの総合農場として移転した。附属演習林は創立の当初から現在地朝日村上名川にあり750haの面積で経営されている。

農学部は庄内分野4万haの美田をひかえ、いわゆる庄内米の穀倉地に位置する。この平野は日向川、最上川、赤川などの河川を流下する土砂が扇状堆積し、またかつての湖沼が隆起して干陸化した地域を占める。土壌は低湿地に属するものが圧倒的に多く、泥炭質土壌が海岸の砂丘地に沿って細長く分布するほか所々に部分的に現われる。古い時代から耕地の条件を良くしようと灌漑水や排水を整えるために大きな努力がなされてきた。

日向川は鳥海山にその源を発し安山岩質火山砕屑物や火山泥流地帯を貫流して日本海に注ぐ。最上川は遠く吾妻山にその源を発して県内を北進し新庄盆地で流路を西北に変え出羽丘陵を横断して庄内平野に出て日本海に注ぐ全長232kmの大河川であり、数多くの支流を合してその水質は火山灰や温泉地の影響をうける。赤川は月山の安山岩質火山泥流の影響をうける梵字川と第三紀層や花崗岩などの地帯を水源とする大鳥川との合流した延長75kmの河川である。この川は庄内平野を北進し河口附近で最上川と合流し日本海に注いでいたが滞水被害を除くために昭和30年頃黒森附近で西進して直接日本海に出る放水路が開設されこの附近からさきの旧赤川は干拓された。

上記各河川の水質を比較するとよくその水源の地質を反映していることがわかる。赤川は可溶性塩類が最も少なく特に珪酸分は日向川のおよそ半量以下の濃度である。最上川と珪酸含量は日向川に近いがその硫酸分は他の河川よりも甚だ多い。水稲はその含有成分のなかで珪酸を最も多量に吸収する作物である。この珪酸はいわゆる肥料3要素とともに特に重要な養分でありその供給量の多

少は水稲の生育状況に大きな影響を与えている。硫黄は作物に必須な成分ではあるが排水のよくない水田ではややもすると生育を害する不良の土壌環境を醸成するおそれがある。それ故硫酸は硫黄を含むのでその過剰の存在は好ましくない。庄内地方の水稲収量は全国的にみて最も多収穫の地帯に属するがさらにこの地域内でその収量を比較すれば、記録に残る江戸時代の頃からすでに北部の鳥海山系に属するところが最も高く、余目附近の田川北部平坦地帯がこれにつき、山添附近の赤川扇状堆積地帯が一般に低位の収量を示す傾向があるとされている。これは土壌その他立地条件によってもたらされたものであることは当然であろうが、これら地域の灌漑水は北部では日向川、余目附近では最上川、山添附近では赤川の各水系にそれぞれ負っているの、さきに示したような水質が各地域の水稲の生育にかなりの影響を与えていることも否めないとされる。

赤川はかつては扇状地形の上いく筋もの川道をつくり洪水のたびにそれが変遷したといわれる。天文年間(1532-)に武藤氏が大宝寺城(鶴ヶ岡城)から尾浦(大山)にその本拠を移したのは赤川の水難を避けるためであったともいわれている。その次の最上氏の時代は慶長6年(1601)から元和8年(1622)までであるが、最上義光は大宝寺城を修築して慶長8年(1603)にこれを鶴ヶ岡城と改称しこれを隠居城と定めた。その際に赤川の治水に着手し本流が城の方向にむかないようにその東側に流路を変えた。現在鶴岡市内を流れている内川は旧赤川本流であるといわれる。最上氏時代には赤川治水とともに灌漑水路の幹線もほぼ完成したようであるが酒井氏時代になっても新田の開発に努力が払われた。酒田氏の庄内領有は元和8年(1622)10月でその表向きの禄高は138,000石であったが翌元和9年(1623)検地を行って47,000石もの新田を発見した。その後明暦元年(1655)までに、16,000石、貞享元年(1684)までにさらに12,000石の新田の開発があったといわれる。新田には年貢を3ヶ年間免除したり石盛を減じたり面積の算定をゆるくしたりなどの優遇の手をうってその開発奨励につとめたことが記録に残っている。とにかくこのような先人達の大きな努力によって現在の美田がもたらされたことを忘れてはならないと考えている。

(山形大学農学部部長)

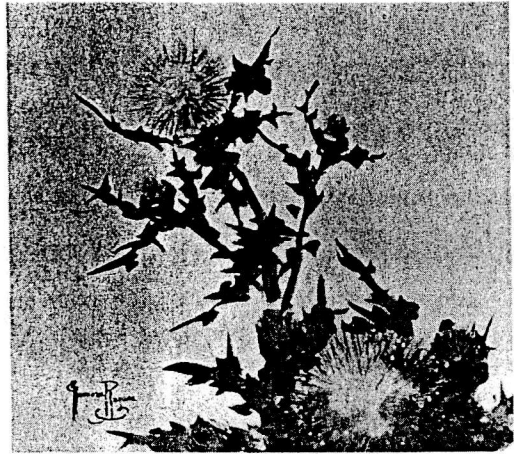
資料紹介

I

ラグーザ夫人・清原玉女の絵

当館に収蔵されている絵画資料は、52点であり作品の

大部分は、本県出身画家の制作品であるが、中に珍らしく、ラグーザ夫人お玉さんの筆になる水彩画「あざみ」



「あざみ」

の絵がある。柔らかいタッチと、抑揚のある色調に、静かな情趣のにじむ、味わい深い絵である。お玉・ラグーザ研究の一資料と思うので、同女についてのあらましを紹介することにしよう。

お玉さんは、清原タマと言って、東京芝金杉町の植木屋の娘で、容姿の美しいのと、気立の優しいことから、近所の人々から「金杉お玉」ともてはやされた。

夫となった、ラグーザ氏(Vincenzo Ragusa)は、明治8年(1875)日本最初の美術学校である、工部大学附属美術学校が創立されたとき、イタリアから画家のフォンタネージ、建築家のカッペレッチーとともに、お雇外人教師として招かれた彫刻家で、同校で教鞭をとり、わが国に大理石彫刻・塑像・石膏の型取りなどの洋風彫刻の技法を導入し、その発展に貢献した人である。その典雅な写実的傾向は、形式化したこれまでの彫刻界に、大きな影響を与え、門下からは、九段靖国神社の大村益次郎銅像をつくった、大熊氏広、陸奥宗光銅像の作者、藤田文蔵らが出た。

お玉さんが、ラグーザ氏と国際結婚するに至った事情は、当時、ラグーザ氏は、お玉さんの家の近くの三田小山町26番地にアトリエを構えていたが、たまたま、お玉さんの優美な姿を垣間見てからは、その魅力に引かれ、芸術家らしい情熱から、お玉さんをモデルに懇望したが、そのきっかけである。

工部大学美術学校は、明治16年(1883)西南戦争後の緊縮政策と、国粹主義の抬頭により、廃校のやむなきに至ったので、ラグーザ氏夫妻は、学校が正式に廃止になる前年の明治15年(1882)8月に日本を去った。帰国後のラグーザ氏は、故郷シシリ島のパレルモに、工芸学

校と工芸美術館を創立し、自らその長となって、後進の育成にあっていた。

お玉さんは、彼の地に渡ってから、夫君の指導で絵の勉強をはじめたのであるが、その技の進歩はめざましく、ひとときわすくれた、女流画家となり、明治37年(1904)アメリカのセントルイスで開かれた万国博に、その作品を出品したところ、婦人の部で、一等賞を獲得した。また、彼女の才能をイタリア政府が認め、同国の国定教科書に、さし絵を描くことを依頼されたりして、彼の地で華やかな画名を馳せていた。

然るに、夫君のラゲーザ氏は、昭和3年(1928)3月13日永眠した。玉未亡人は、その後もしばらく、同地に留まっていたが、さすがに、望郷の念禁じがたく、遂に意を決し、昭和8年(1933)10月22日、夫君とともにイタリアに渡ってから、52年ぶりに故国の土を踏んだ。

帰国後は、たった一人の身内である、姪の初枝さん(当時24歳)の家に身を寄せたが、清原家の家族から、優しくいたわれ、同家の二階四畳半に、アトリエを構え、好きな絵筆をふるい、日本の美しい風景を描きつけ、楽しく幸福な余生を送っていた。亡くなる前年の秋には京都・奈良方面に写生旅行に出掛け、その制作品の個人展などを開催し、売上金は、戦地の軍隊慰問の費用として、献金したりしていた。また、卒倒する前夜も、遅くまで絵筆を振っていたということである。

このように、数奇な運命を辿った、お玉さんは、明治14年(1939)4月5日朝、突然、脳溢血で倒れ、身内の手厚い看護の効もむなしく、翌6日の午前2時、ついに亡くなられた。享年79歳であった。

(註) お玉さんが帰国の際、夫ラゲーザ氏の遺作を多数持参したが、それは全部、現在の東京芸術大学に寄贈されている。

II

近世史料古文書

当大学附属博物館の性格は、総合博物館の性格をもつため、収集されている資料は、人文科学・社会科学・自然科学の各部門にわたり、数多く収集されている。この中で特に注目に価するものに、歴史資料として、県内各地から収集されている、近世における農山漁村文書、すなわち、地方文書が約五万点以上も保存されていることである。単に収集保存されているだけでなく、それが整理・分類され目録化しているため、大学の研究や教育に利用され、学術文化に便益を与えている。この意味で、当館は、博物館の機能のほかに、資料館的・文書館的機能を併せもっていると言える。

一 史料の収集状況

当館では、近世文書を広義に解して、いわゆる地方文書は、名主文書(庄屋文書)だけに限らず、商家文書(町方文書)漁村文書、交通(宿駅も含む)文書、寺社文書、それに武家文書等を幅広く収集している。また、明治以降の近現代文書——戸長役場文書、市町村役場文書も収集の対象としている。

したがって、その取扱い範囲は、年代的・地域的に非常に広汎にわたっている。特にまとまっているものでは置賜地域の、和田村文書、新田村文書、洲島村文書、沖郷村文書、口田沢村文書、成田村文書、中津川村文書等村山盆地のものでは、山形市の商家関係文書、三浦家文書、南金井村文書、陣場村文書、寒河江市の高松村文書三泉村文書、慈恩寺の最上院文書、山辺町大蔵の稲村家文書、西川町吉川の笹島家文書、天童市の白田家・青柳家文書、村形家文書、大石田の渡辺家・二藤部家文書等数えあげれば、きりがないうる。

ただ最上地域、庄内地域の文書が少ないのが残念である。

二 史料の整理状況

ここでは、技術的な整理・分類の方法は略して、53年4月1日現在、整理し、目録化されているのは、136冊に及び、文書点数にして、16,571点となっており、これに未整理分推定約36,562点を加えると、合計53,133点以上となっている。整理された文書目録のうち、印刷して、一般に配布している「古文書近世史料目録」は下記の10冊である

第一号	大石田	渡辺喜助家文書
第二号	寒河江市慈恩寺	最上院文書
第三号	山辺町大蔵	稲村家文書
第四号	天童市	青柳家文書・久野本村文書
第五号	山形市	鮎洗村文書
第六号	天童市荒谷	村形家文書
第七号	山形市	三浦文庫文書(一)
第八号	山形市	三浦文庫文書(二)
第九号	山形市	五十嵐家文書
第十号	山形市	三浦文庫文書(三)

三 史料の利用状況

当館の古文書整理・分類の目的は、あくまでも利用者の便益を図ることにあるため、内容による主題分類法である。そのため、必要資料の検索が容易で、研究が能率的に行えるので、研究者は大いに喜んで、この史料を利用し、価値の高い学術論文や著書・編書などが書かれ成果があがっている。

- 当大学の教官・学生が研究や教育に利用している。
 - 教官は歴史研究の資料として、また講義・演習等の教材に使っている。
 - 学生は卒論等の資料に使っている。
 - 内地留学生の研究資料として使われる。
- 他大学の教官・学生・研究者に利用されている。
参考までに当館の史料を使って発表された学術論文のうち、主なるものについてあげると、次のとおりである。
 - 藤田 覚（東北大学院博士課程）（昭和46年）
 - ・天明寛政期の農村構造と「豪農」
 - ・村山地方における農村構造展開の特質
 - 岩松 勝（松山商大教授）（昭和47年）
 - ・石代値段と米価の相関性
 - 出羽を中心として—
 - 大藤 修（東北大学院博士課程）（昭和48年）
 - ・近世農村における家族構造
 - 村山地方宗門人別帳の分析を通して—
 - 中村政則ゼミ（一橋大学教授）（昭和48年）
 - ・東北型五〇〇町歩地主経営分析
 - 山形県村山・渡辺家を中心として—
 - 丹羽邦男ゼミ（神奈川大学教授）（昭和51年）
 - ・明治前期における東北農民の存在形態
 - 山形県東村山郡鮎洗村—
 - 黒須 茂（上尾市教育委員会・市史編さん員）（昭和53年）
 - ・武州の紅花
 - 最上紅花との関連を中心として—
- 県史をはじめ、各市町村史の編集資料として利用されている。
 - 山形県史 検地帳上、中、下、村差出帳、慈恩寺史料、近世史料1、2、古代中世史料
 - 市町村史 山形市史、酒田市史、天童市史、大江町史、大石田町誌、高松村史、村史なかつがわ、金井村誌、本沢村誌、飛鳥誌ほか。
 - その他 山形県教育史の編さん資料
各学校百年史の編さん資料として。
（中沢勝麿）

日付けて停年退官となり、新館長に、川副武胤人文学部教授が任命されました。

川副館長の略歴

本籍 神奈川県

大正11年4月15日生（56才）

昭和26年3月 東京大学文学部
国史学科卒業

- 〃 29年3月 同 大学院修了
- 〃 29年4月 鎌倉市史編さん員
- 〃 35年4月 総理府技官正倉院事務所勤務
- 〃 42年4月 山形大学講師 人文学部
- 〃 43年4月 山形大学助教授 人文学部
- 〃 44年10月 文学博士
- 〃 49年4月 山形大学教授 人文学部
- 〃 50年12月 学芸員資格取得
- 〃 53年4月 山形大学附属博物館長



<特別展> 最上川「渡し」、歴史展見学者数

（昭和35.2.13～25）

一 成 般 人	個人	140 (人)
	団体	20
大 学 生	個人	151
	団体	33
児 生 童 徒	個人	4
	団体	0
合	個人	295
	団体	53
計	総数	348

<博物館利用状況> 昭和52年度

一 成 般 人	個人	983 (人)
	団体	7
大 学 生	個人	252
	団体	198
児 生 童 徒	個人	17
	団体	208
合	個人	1,252
	団体	413
計	総数	1,665

お知らせ

- 従来まで使われていた「山形大学附属郷土博物館」という名称が、昭和53年5月31日付けて「山形大学附属博物館」と改められました。
- 前館長 工藤定雄教育学部教授は、昭和53年4月1

山形大学附属博物館報 No. 5

1978. 7. 1 発行

編集兼発行人 山形大学附属博物館

(〒990) 山形市小白川町1丁目4-12